コロナが収束しそうな？　夜のこと

加藤　誓（ちかい）

名古屋市内のコロナの「新たな感染者数」がゼロになったとニュースでいっていた。

その夜、元の会社仲間の麻雀大会が藤が丘の雀荘で始まった。私の組はいつものメンバーの４名が揃っている。もう一つの組が２名だけで揃わない。「あと２名誰でもいいから早くこないかなあ。」すると、私の学生時代の仲間の２名が、「ごめん、ごめん。新幹線が間引き運転で、遅れてしまい申し訳ない。」と汗を拭きながらマスク顔で現れた。東京から飛んできたのだ。「揃ったから、さあ、始めるか。」「おばちゃん、生ビール大ひとつ。「俺も！」
雀荘のおばちゃんは大勢のビール運びで大忙しであるがうれしそうである。
向こうの方で、手を振っている人がいた。同じ町内の麻雀仲間である。「久しぶり！元気だった。」
「今日は久しぶりに、たらふく酒を飲むぞ！」

「おやじ、焼き鳥。砂肝に皮、ハツとなんこつ。それから、レバーも頼むわ！」会社の仲間と町内の仲間が飲むは！食べるは！しゃべるは！
何時の間にか雀荘が「焼き鳥の店」になっていた。
そして、皆、マスクはしていない。焼き鳥屋は大繁盛で大将は冗談をいいながらも、手だけは、次から次と焼き鳥の串をひっくり返して焼いている。「おかあちゃん、焼酎おかわり。」「俺は、ハイボール、いやロックにしようかな。」「ウィスキーのつまみは、やっぱりブルーチーズが、いいなあ。」
「ま～、加藤さん、いらっしゃい。久しぶり。店もコロナで一年間の休みで大変だったのよ。」
「ボトル、ちゃんと、そのまま保管しておいたから、今日は全部飲んでいってね。」
店にいた、いつものメンバーに「よかったら飲んでください。」とふるまい酒。

自分もロックで飲み、ボトルが空になった。だが、どうしたわけか一向に酔わない。ママが「カラオケも一年ぶりで、マイクのほこり、さっき綺麗にしたから、たくさん歌ってね。」「何を歌う！」
何時の間にか、焼き鳥屋がスナックになっていた。
「宗右衛門町ブルースがいいね。」なぜかいつも出る高い音が出ない。ママが助け舟とばかり一緒に歌ってくれた。お陰で９２点の高得点が出た。

「次の曲は、美しき天然をお願いします！」「♪空にさえずる鳥の声～・・・♬」
「あぁ、ちんどん屋の曲ね。」
ちょんまげのかつらをかぶり、着物姿でサックスを吹きながら私は踊り始めた。
何時の間にか大須商店街になっていた。大勢のひとがチンドン屋の私をみて笑っていた。
向こうから、私の主治医である糖尿病専門医が白衣を着て、看護師ふたりを連れて現れた。
「加藤君、酒は飲んでないでしょうね。」「先月の外来で酒は飲みませんと約束したでしょう。」
看護師のひとりが、「私、しっかり見ていたわよ！」と目を吊り上げて　叫んだ！
びっくりして、布団をはねのけ、目が覚めた。　　楽しい夢だった。

ただ、雀荘も、焼き鳥屋も、スナックも、今は廃業し、存在していない。